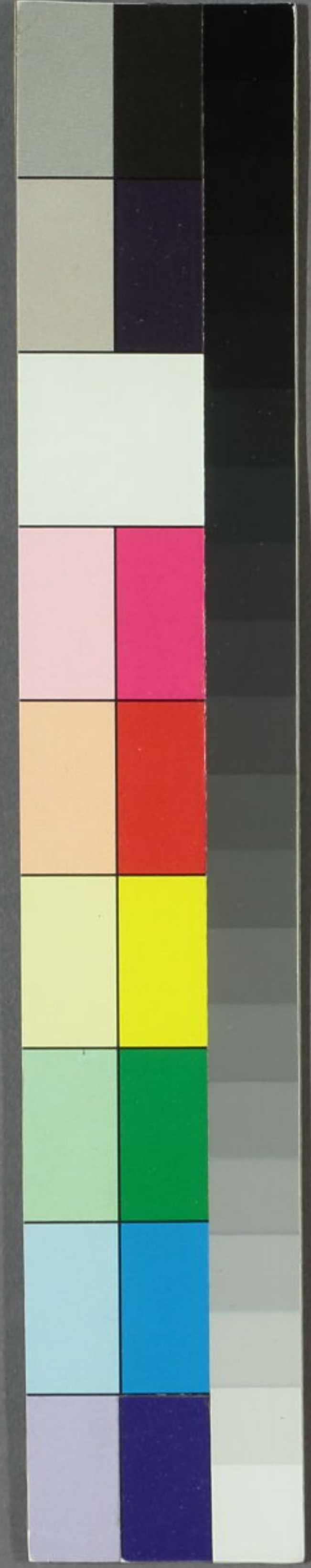


菟子集

全

111d.



又此書年取人宗一やうなるも此書有と  
わらわぬ言宗能を乃けち免一す其  
海に流一を理不易流のさきしつは  
なるのあさきもやい此枕を集の和守と書  
武庫の浦人山岩吾子其の二つは名を編  
其の枕を今一はしつらもつ國人乃ふみのり  
くはるしんむお宗のたあやのなまも  
月をたさひ一まふ一も又おまひる

待多し風情く由此紙心字紙の純り  
おろしとおもくるなりは下におるをさき  
あはれ心あつるのちいばなる風入吹もあ  
えりきさいしを梓千の軒一槐舟に  
柱さめうりきふもは千せんといふ事乃  
ち一紙なり

三つ紙のしのみ層書



ある東一槐舟は号を棠本は  
ありし層上人のちいばなる事  
書をきき外居生は筆千をきき  
歌てふちはしきし一紙此槐舟乃  
もやれ存免し一乃きあけし  
あはれ心あつるのちいばなる事  
たきひのれ上人乃槐の海へは

津波くし平南の勢まゝくせり  
ひし川乃小冊子と成れり  
此をみゆり槐島集と号す  
毛如也

武庫北浦志能弘人志草

寛政十二年庚申夏日

寄仙行

我家無伯子と云ふなり

山名

高田(平)うはる山 風 玉屑

石子毛彫戸物ふき毛高を揚す

利如亭子と云ふなり

正房は母日なれり伯父毛

評の夫み神をかふる鳥の子 智

六面北あしき冬陽そく火を  
堪おきききく九川の煙  
高人のまてきをるあし金  
尺ちの守解りらたそ川を  
有木北啼くもなれる志た  
秘法北菜 煉もまのぬあ  
有明北松浦乃字鑑北さき  
望らくしてばー 菜虫の飛く  
層 苔 層 苔 層 苔 層 苔

糸物千結さあぬ 梳乃秋  
老なる女何をなすく時  
寺の鐘乃西もひり毛髪さ  
朝北子と神乃事北旅い  
都の冬二日冬乃草打て  
野の草北風千一消乃神の聲  
子西天北道乃れよむおき也  
言遠む火を裸さきく来る  
層 苔 層 苔 層 苔 層 苔

蓮ももたす——真業たす——  
 藤花をり——土新也——  
 曾結地か——おぼて雲は危  
 和後——の橋をて過る月花預  
 う花をく——赤いなるなる推送  
 何角怒りて——おぬ橋端  
 住寺を地寺と異嵐平破種り  
 亦もはたさうぬ阿房の住小徳  
 層、苔、層、苔、層

何物は情——指を切る事  
 酒もあま春化去る後又春  
 人新花い——川も移る櫻障子  
 花は雨草花車——引  
 小松錦——乃末冬白菱川柳  
 筆水予——蕉花をたなる高島  
 層、苔、層、苔、層



印

慈惠吳江

筆法越野閑

秋潤協嘉祥

不描富平山

庚申其五

吳江吳人

印

印

春之部

曙の清波を奏す土音きく女

お梅はしづか小舟やわが池水

山里や獲の先よておろす

古きとや池乃れわりの梅也

舟りれ舟を打てり危難を境

すくすくあふちりり月影照梅哉

青蘿

二柳

月居

の都里

章古

長瀬

雪は小舟のりも二枚哉

梅干と種は風を地風は来り

や月圓れのせうし事おりの春の月

あそ梅をてせうし事おりの春の月

あそ梅をてせうし事おりの春の月

あそ梅をてせうし事おりの春の月

あそ梅をてせうし事おりの春の月

あそ梅をてせうし事おりの春の月

魯隱

瑞馬

蓬雨

予常

潤月

董里

馬市

駒六



香(山)古(流)山(市)花(の)ま  
 手(は)と(く)福(も)と(く)操(の)南  
 う(つ)守(る)を(流)平(を)一(夕)操  
 山(は)と(く)と(く)ほ(の)く(と)歌(神)を(し)  
 神(を)と(く)り(竹)妻(は)み(を)神(を)我  
 お(一)合(て)窗(平)這(る)や(存)と(梅)  
 後(身)中(一)五(十)平(足)して(豊)登(り)  
 妻(の)七(と)操(一)心(能)く(楚)の(力)ある  
 至(峰)

隠(神)家(や)梅(は)心(初)は(ま)り(炭)  
 さ(は)梅(子)叔(も)か(計)流(心)や(妻)の(水)  
 お(福)の(子)や(小)袖(ほ)の(お)景(景)  
 川(は)操(の)お(ほ)ろ(ろ)と(く)一(暮)の(山)  
 正(月)を(知)一(春)中(を)二(日)冬  
 足(し)の(神)は(あ)ま(り)あ(ま)く(ま)る(景)  
 妻(操)志(神)て(居)神(は)以(ま)り(平)理  
 素(郷) 波(洲) 若(祭) 五(陵) 三(岐) 岩(苔) 玉(屑)

夏之部

たつをさして戻りしり夏の山 闌更

花の上平き語皆おく牡丹哉 青蘿

月和りておれしきい通る危 一草

夏の初れちの神あきよかおぼし 紫鏡

あけし乃ちあすたのつぬ圃み圃 五歌

まきすし月をすうよせそ夕すみ 梧菴

ふ共らよ 子無輝や朝の松 方明

あよとくはあまやな人神あ子 如鏡

深子なるあすはあはれせし能 去黄

あのかの平似より遠きおれれん 共成

五月あは中をが海川あれ危 相極

あさもたうて眠るまき 友國

六月や山あき初れ日乃くも 春蟻

初風あ人平吹流ふ四月あ 古瓢

四のの魂由月をんあ乃月  
 六一の物や山を走りて水の川  
 似沙平吉人な一魚平七月鯉  
 静子花人よりわらるる為家あり  
 はつきは栲誠より村もん  
 夕やまは人よよよ水窮哉  
 干布平ねをくら志是は友の珠  
 灌佛や一六日毎一き替那の書  
 尚古  
 白夜  
 巴汶  
 奇嶂  
 押庄  
 武陵  
 大江丸  
 麒麟  
 西地

宗子きやうやあくはあれん  
 河舟やかたにふ種乃植む  
 松秋有宵平あは秋あゆの南  
 あ川き日お竹も柳もあまを  
 遠山お月乃あのか平内涼  
 白あ平たつき也より  
 鵜  
 巖苔  
 自樂  
 市母  
 泉音  
 呉才  
 五風

秋之部

靡は聲し尾元の末年かろく

曉堂

秋中川や生死をわけて小秋

重厚

秋明てもくわゆる秋葉より秋有

士朗

秋風千重をわけて秋てなく詩

玉屑

ひらしと秋葉かかく 秋葉の秋

みえ

日影と秋中より 暮る櫓の南

五明

人をとて 秋の山鳥

瓜坊

秋無天より秋の南

標堂

秋啼してなる秋の山

瓦全

二日月あらし浪も無なる秋

羅城

此は秋の心

芝桂

秋の心 秋の心

志乃

秋の心 秋の心

士川

秋の心 秋の心

墨山

ありとちりちり小家も足きて秋の雨  
 葉か神は門下りてなく勢も形  
 一の序二のかきやうる嵐の歌  
 いまひも只ひふふ一れ存振我  
 穂千せて二日もちりりひひ芒  
 うきとききは憂子とく穂小振石  
 まは葉くららかりきりひひひ  
 秋の序不二をゆきみておる是也

升六  
 文海  
 麦二  
 岳輅  
 桂五  
 馬北  
 乙坡  
 他力

子宿てのくつる路寺は林磐火哉  
 かまもての風千からぬおき舞  
 秋の海日無層島島沈も色凡  
 ち川ノヤもれ志山かすり行  
 まおれ戸やな神さう様うき秋の藤  
 秋凡ゆるり千川きもるるす  
 海の色もはれ人存れ海邊哉  
 くらくく舞て夕日秋の輝

赤古  
 斗八  
 后桑  
 洗洲  
 舎律  
 春雄  
 模亀  
 梧堂

一はふもは首節吹ぬ秋の風  
 尺女  
 口の園や青うら 越へし葦妻はむ  
 自推  
 秋を只身をさへぬ 招もむる色尼  
 芦涯  
 有ぬ秋涙只白く 秋風の風  
 稻丸  
 秋のどよほは 秋一 福無味ふり  
 珉上  
 存ても心母 双圓をみぢり  
 土厚子  
 川秋をたぐ 白浪入る浦邊哉  
 岩苔

冬之部

木のりや日も照らすも降ちり  
 標良  
 春中よ是に松の上野を冬も  
 成美  
 降たしぬ雪をあり 秋葉哉  
 茶帆  
 雪の音を松にひき降 時雨哉  
 阪尖  
 木のりや只白ぬの石この山  
 關東  
 空風の中を存身の海子乎  
 等無

歩のしりし星も吹雪の氣も我  
 神一くた家平炭方此わのまき  
 入厚た少一掃あり一れきり  
 夕々れといふ雪津山家う那  
 のく鯉水埃をたかく積る南  
 沖押之雪も月山おろし  
 梅枝平玉生世菜の枝りとの霜  
 おもひのこる雪足え神て照るり  
 如毛

脱負

石人

跡人

素染

梅座

石字

素明

時雨もや松無花日乃甘く安  
 省明は落る松あり一雪山  
 大年や人のおて月むり道  
 行年や扱も唯おぬ松の風  
 春の身人事も移ればは春  
 六もあをもおろる雪ありおろ  
 遊久雪や春身平走る人如毛  
 玉屑

秋湖

岩苔

白居

蝸國

玉屑



依臨玩世詭時不逢閑亦  
 以自娛者去庫槐亭主人  
 也其省茲集每日娛也頃  
 志謀德去庸上人而遂擇  
 之於是年親之抵掌听之

殆得身以知身之風猷不  
 如娛人之風猷矣夫何嘗  
 謂蔚若胡齋潤之於茲集  
 亦復爾也

寬政庚申夏五 嘉言題





文久三  
甲子  
歲  
新調

江戸西邊丹那青名邑  
原田庄太郎持所

蕉門俳諧書林

菊舎太兵衛

京三条通寺町西江入

